

■ エッセイ ■

■ 川村正敏 ■

「デジタルブック」の未来はまだ見えず

二〇〇九年。「紙」の本や雑誌、新聞がごく当たり前の時代が、いまだ続いている。

パソコンやインターネットはそれなりに普及した。パソコンは千世帯あたり全国平均九九九台（大分八四五台）保有され、インターネット利用者（十歳以上、過去一年間に利用した者）も全国平均五九・四％（大分四九・七％）にまでなった。（総務省統計局「平成十六年全国消費実態調査」、平成十八年社会生活基本調査）

※ ※ ※

しかし「ペーパーレス」とはならない。一時期、パソコン普及のPR文句の一つとして謳われた「ペーパーレス」だが、中途半端なIT化で満足してしまつた多くの組織では、必死になって電子データをつくる一方でプリントアウトしたものにペタペタ印鑑を押して回覧するようなことが平然と行われている。

パソコンを電卓やワープロの延長としてしかとらえていない証左で、業務フローを変えてまで省力化やコスト削減を図ろうという意識はそこにない。ペーパーレスの効果としてせいぜい紙代節約くらいしか想像できなければ、これまで慣れ親しんできた業務の流れまで変える気にならない

のは当然でもあるのだが……。あと一歩進めれば、パソコン導入の本当のメリットが享受できるだろうに、もつたいない話だ。

完全なペーパーレス社会が到来することは、何百年先を想定しても、まずあり得ないと私自身も思っている。「紙」を使うことが重要な場面は必ずある。しかし「紙」でなくてもいいものにまで「紙」を使う必要はない。どうしても「紙」を使いたいときだけ使う、という分別使用が常識化した社会はあつていいし、地球環境の面からもあつて欲しいと思う。

通常の書類は「紙」である必要があるのか？、通常の新聞は？、通常の本は？、通常の雑誌は？……

※ ※ ※

二〇〇九年時点で普通に作られている電子書類を見ると、「紙」にプリントアウトして読みたくなる気持ちも理解できる。

世の中の業務文書の大半は、A4またはB5サイズ用の紙を縦使いにして横書きで文章が流れるレイアウトだ。文字の大きさ、文字間隔、行間隔等々、プリントしたときの読みやすさが判断基準となつて設定されている。

その結果、パソコンのディスプレイ上での見え方は後回し、二の次。ページ全体を眺め渡そうとすると文字が小さくつぶれ、文字を読もうと拡大するとスクロールが必要になる。長文になればなるほど、ディスプレイで読み進めるのはつらい。

一般の人々が作る文書類のみならず、IT化を牽引すべきデジタル機器のメーカーやソフトウェア会社のパンフレットやマニュアル類までそうなのだから、何ともはやである。ちよつと手を加えてくれれば、ディスプレイ閲覧もできるのに、大半は、縦長レイアウトの印刷物をそのままPDF形式のファイルにしてウェブ上に置いている。

パソコンのディスプレイは、基本的に横長である。その横長画面に、文字の大きさがちよつとよくなるようにページを過不足なく納め、マウスのクリックなどでページ移動ができるようにするだけで、「ディスプレイ閲覧」向きの電子文書が基本的に出来上がる。

それだけのことなのに、ほとんどの人がそんなことはない。プリントして読むことを暗黙の了解事項とし、ひたすらA4縦、B5縦の文書づくりにいそしんでいるのが現状だ。学生たちに聞いても、長文をパソコンで読むことなんかしなないと無邪気に口を揃える。

しかし、将来を考えると、低コストで情報を複数の人々に伝達する手段として、ディスプレイでそのまま閲覧できる電子媒体は欠かせない。インク代や印刷コストが跳ね上

がるカラーものは、なおさらだ。いちいちプリントするなどもつたいない、贅沢だ、無駄だ、犯罪だという価値観が社会全体に芽生えてくれば一気に加速するだろうが、そこは神に任せるしかない。

※ ※ ※

別府大学に転じて以降、前職の出版社勤務時代にライフワークとして始めた「デジタルブック」づくりを、大分合同新聞と組んで続けている。有力出版社や電機メーカーがつくりだしてきた「正統派」の電子書籍につきまとう「営利目的」という呪縛を捨て去ることで、地域に根ざしたデジタルブックづくりの可能性は見えてきた。単なる電子文書から「書籍」の価値を持つものに引き上げるための条件の整理、一般の人々でも可能な簡易版デジタルブック作成法にもいちおうメドが付いた。

「あだ花なのかなあ」と定期的に弱気になりつつ、デジタルブックを普通に読む文化が大分に芽生えたら面白いなと夢見る日々。夢で終わるのも悪くないが、さて。

(別府大学准教授)